

小学生の部 最優秀賞

『知らなくてごめんなさい。』

常磐小学校 四年 名和 里佳子

私がハンセン病のことを知ったのは、あるテレビ番組がきっかけだった。その時私は、むねがいっぱいになって、苦しくなった。

「ハンセン病を知っていますか？」というタイトルの番組で、元患者の平沢さんの話を聞いた。

私は、平沢さんを見ておどろいた。平沢さんの手は、病気のせいでひねられていて、顔の皮ふは、てかてかして、ものすごく分厚いメガネをしていた。私は、いっしゅん息をのんだ。

平沢さんは、今の私より少し年上の十三才の時、つまり、私のお姉ちゃんと同じくらいでハンセン病になって、その時からずっとハンセン病の人が住む町に住んでいる。ハンセン病は、「悪いことをした人になる。」「神様やほとけ様のばちがあたった。」と言われ、今から十年ほど前までは、ハンセン病になったら、家族と一緒にくられせない。それどころか、家族もハンセン病の菌を持って

いると、こわがられ、差別される。そして、同じ病気の人だけが集まって、集団で生活させられる。

生活するといっても、学校に行ったり、遊んだりするのではない。自分たちに必要なものは、自分たちで働いて作ったり、同じ病気で苦しむ人の世話をしたり、そうじも洗濯も全部自分でやる。

もし私が今、そうになったらどうしよう。

私は、お父さんとお母さんとはなれたくない。病気になるだけでも怖いのに、ひとりぼっちになるなんていやだ。名前を変えるのもいやだ。私の名前は、（ふるさとを大切にできる、よい子になりますように：）という願いが込められている、世界に一つの特別な名前だ。それなのに、その名前を変えて、本当の私じゃない私として、家族とも一生死ぬまで、死んでからも、会うことができないなんて、なんかおかしい。

それなのに、どうしてそのおかしいことが、長いこと続いてきたのだろう。だれもおかしいと気づかなかったのだろうか。

それは、「らい予防法」という法律があったからだ。ハンセン病が広がるのを防ぐため：という理由で、「いい病院がある。」「一年で病気がなおる。」と言われながらかくりされ、そこから出てはいけないという法律だった。

だから、もし、だれかがおかしいと思っても、法律で決められたちりょうをしているから：と、病気の人は、まるで捨てられたみたいな生活をしてきた。ハンセン病になると、人間なのに、人間じゃないみたいな生活しかできない。

病院なのに、ろう屋があつて、火そう場も、お墓もある、こわいところに一生閉じ込められる。そして、それは絶対におかしい。

けれども、気の遠くなるような、長い年月の後、「らい予防法」は、間ちがつていたとして廃止され、今は、法律の上では、らい病の人に対する差別はなくなった。

でも、私だったら、「私の大切な時間を、閉じ込められた私の時間を返せ。」とか、「差別をしておいて、今さらなんだ。」とか、文句や恨みしか言えないと思うのに、平沢さんは、

「恨みからは何もうまれない。この病気のことを知ってほしい。そして、ここで力一杯生きている私たちのことをよく知ってほしい。」と、とてもおだやかに言う。

私は、平沢さんこそが、本当にやさしくて、強い人だと思う。憎しみを憎しみで返さないから。憎しみを憎しみで返すと、もっと深い憎しみになるという。

今、私は、最初じつと見ることでできなかった平沢さんのねじられた手を、じっくり見ることができた。はじめはこわいと思つてしまつたが、今でもやっぱり少しこわいけど、「がんばつて！」ではなくて、「知らなくてごめんなさい。もっと一生懸命勉強して、ハンセン病のことも、その病気で苦しんだ人たちのこともきちんと考えます。平沢さんの気持ち、私には、ちゃんと伝わったよ！」とあく手をして、気持ちを伝えたいと思う。

正しく知ることが、差別をなくす第一歩となり、知ろうと思うことが、今、私にできる一番のことだと思う。

小学生の部 優秀賞

「おたがいさま」の心

則武小学校 六年 近藤 響希

「おたがいさま」この言葉が、私の心にじんわりと響いた。

今年の夏休みに、私は、青少年赤十字の子ども新聞プロジェクトに参加し、御嶽山噴火災害の被災地の取材をした。

そこで、噴火直後の御嶽山で、トリアージを行った、山岳医の

上條剛志先生から聞いた言葉が、この「おたがいさま」だ。

私は、今まで、あまりこの言葉を使ったことがなかった。どちらかというと、けんかなど、良くないことをした時に使うイメージが強かった。

しかし、上條先生から聞いた「おたがいさま」の意味は、今まで私が考えていたものとは、少し違っていた。

「行きたくない」

上條先生のトリアージは、そんな気持ちで始まった。上條先生は、山岳医であり、DMAT隊のトップだ。

DMATとは、災害時に、すぐに医療ができる人を集めたチーム。平成二十六年九月二十七日に、御嶽山が噴火し、DMATからの出動要請が出た。その時は、何も考えずに出動した。初めは、

病院の支援や救助された人のお世話をするのが仕事だった。しかし、突然山に登って、トリアージをしてほしいと頼まれた。

トリアージとは、けが人を、重傷、軽傷によって、赤、黄、緑、黒のタグを使って分け、救助隊が運ぶ順番を、分かりやすくする仕事だ。

今回は、四色のタグを使ったが、普段は、黒タグは使わない。それは、黒タグが、助かる見込みがない人で、運ぶ順番は、一番最後、もし噴火が起きた場合は、その場に残して逃げてもよいというものだからだ。

上條先生には、「山岳医の自分しか行けないのだから、行くしかない」という気持ちもあったが、それ以上に「行きたくない」という気持ちの方が強かったようだ。

登っている途中、レスキュー隊のヘリコプターが、視界に入ってきた。「別に自分がいなくてもいいじゃない」そんな気持ちだけが強まってくる。次の噴火がいつ起こるかわからない、そんな命がけの場面に直面した時、私なら、登ることができるだろうか。

山頂に着くと、かわいそうな姿を見せつけられた。亡くなった人は、噴石が飛んできて即死だったと言われていた。しかし、あの姿は即死ではない。必死で身を守ろうとしながら、灰に埋もれてしまったのだ。

一人目のタグをつけてから、上條先生の気持ちはがらりと変わったそう。できるだけのことをしたいと思うようになった。

レスキュー隊は、上條先生のトリアージにしたがってけが人を運ぶ。黒タグを付けるのは、上條先生の責任。助かる見込みがない黒タグを付けるという重い責任の中で、それでもおろおろせず走り回った。私なら、そんなひさんな現場を見たら、逃げ出したくなってしまうと思う。上條先生の「一人でも多くの命を救いたい」という強い思いを感じた。

上條先生は、どうしてこうまでして命がけの現場に行き、トリアージを行ったのだろうか。

それには理由がある。上條先生は、「おたがいさま」だからだと、にこやかに話してくれた。

自分や自分の愛する人が、大変な時には、助けてほしい。だから、自分が元気な時には、大変な人を助けるのだと。

上條先生は、子どものころは、人の苦しみや血を見たくない、勉強のきらいな子どもだったそう。でも今は違う。自分の技術を高め、人の苦しみを和らげ、一度限りの命を救うことに、喜びを感じているそう。

「おたがいさま」は、私たちの身近にもあふれていると思った。誰だって自分や家族、友達が困っている時、大変な時には助けてほしい。助けてもらいたいなら、自分が出来るときに困っている

人、助けを待っている人を助けてあげればいい。

家庭科で調理をした時、片付けが昼休みになってしまったことがある。私は、給食当番の仕事もあったので、あせっていた。大急ぎで、給食当番の仕事を終わらせ、家庭科室に行くと、同じ班の子たちが、片づけておいてくれたみたいで、とてもきれいになっていた。

「ばばっと片付けちゃおう」

と言っていた班の子たちの姿がうかんできて、ありがたくて、うれしい気持ちになった。その時、私も、まわりの友達のために、進んで仕事をしたいと思った。

「おたがいさま」は、相手のことを思いやることだと思う。命にかかわることでもなくても、普段の生活の中にも「おたがいさま」の場面はたくさんある。困っている人がいたら、助けること、落ちこんでいる人がいたら、はげますこと。みんなが「おたがいさま」の心で相手を思いやり、尊重すれば、争いやけんかもなく、だれもが今よりもっと暮らしやすい学校や世の中になるのではないかと思った。

私は、上條先生の取材を通して考えた「おたがいさま」の心を、いつも忘れないようにしたい。そして周りの人にも伝え、「おたがいさま」の心を広げていきたいと思う。

小学生の部 優秀賞

「職業による差別」

黒野小学校 六年 吉口 元康

「このとり肉、だれかがニワトリを殺しているんだよね。ニワトリを殺すなんてかわいそうだし、ひどいよね。」

何となく言ったばかりの言葉に対して、お母さんはこう言いました。

「たしかに動物を殺すのはつらいよね。でも、だれかがその仕事をしているから、元康は今、からあげを食べることができるんだよね。元康は、その仕事をしている人を、差別していることになるんじゃない？」

そのときぼくは、知らない間に差別をしていたことにはじめて気がつきました。そのことがきっかけで、職業による差別について考えてみようと思いました。

ちょうど、一学期の終わりごろ、学校の社会科の授業で、室町時代の職業について学びました。授業のなかで、先生が、

「動物の皮を使って、いろいろ役に立つものを作る仕事は、人々からおそれられ、そのような仕事をする人は、差別されていたんだよ。」

と、教えてくれました。

ぼくは、その話を聞いて、「昔の人は、何てひどいのだろう。世の中で大切な仕事をしている人達を差別するなんて、情けないなあ。」と思いました。

また、修学旅行で行った、世界文化遺産の龍安寺の石庭をつくった人達も、昔は、差別をされていたそうです。その理由も、石や砂などの自然に手を加えて、庭を作っていたからだということです。

ぼくは、実際の龍安寺の石庭を見て、「こんなきれいな庭をつくるのは、大変だっただろうなあ。努力してすばらしい技術を身につけた人達でも、差別されるなんて、かわいそうだな。」と思いました。

昔の人は、おじいちゃんやお父さんがしていた仕事をしなければいけないという決まりがあったそうです。人々からおそれられたり、いやがられたりする仕事を、がんばっている人に対して、差別することは、まちがって

いるのではないかと思いました。

現代では、昔とちがって「職業選択の自由」という権利が認められているため、ぼくは、自分が好きな職業につくことができます。

しかし、今でも昔のように、人々がいやがるような仕事をしてくれている人が、他にもいるのではないかと思っています、ゴミの回収をしている仕事について考えました。

夏休みになって、ゴミ収集車が、おばあちゃんの家の前で、ゴミを持っていくところをよく見かけます。ぼくの家からでる生ゴミは、とてもくさいにおいがします。そんなゴミを暑い中、汗をかきながら収集してくれている人のすがたを見て、「ゴミを集めるのはくさいし、手は汚れるし、いやだろうなあ。でも、がんばって働いてくれる人がいるから、ぼくたちは助かって生きているんだなあ。」と感じました。そして、今度見かけたら「ありがとうございます」と、声をかけたいと思います。

ぼくは、今まで気づかないうちに職業によって人を差

別してしまいました。

しかし、「どんな職業の人にも感謝し、敬う気持ちをわすれてはいけないなあ。」と思いました。そうした人達がいるから、社会は成り立っています。自分が大人になって、一生けんめい仕事をやっていると、差別されたら、悲しい気持ちになると思います。

ぼくは、お母さんの一言で差別をしてしまっている事に気づくことができました。

もし周りに、ぼくと同じような考えの人がいたら、「そういう仕事をしている人に感謝するべきだと思うよ。差別するのはまちがっているよ。」と教えてあげたいと思います。

そして、どんな仕事をする人も、ぼくたちが生きていくために必要な人だという考えを広めて、もっといい社会が成り立つように、がんばりたいと思います。

中学生の部 最優秀賞

真の意味での平等とは

岐北中学校 二年 高橋 彩華

自分は、わりと誰にでも、同じように接することのできる人だ
と想っていた。友達はもちろん、苦手な人ともコミュニケーション
をはかることができるし、祖母が身体しようにがい者であること
もあり、体の不自由な方の介助も、すすんでやることができるか
らだ。

しかし、私は、本当に差別をしない人間なのか。ただ自分が、
誰にでも平等に接することができるんだということに、優越感を
覚えたくて、行動しているだけではないだろうか。ほかの誰かに、
「認めてもらいたい」という思いが、心のどこかにあるのかわし
れない。

本当の意味での平等ということが、今の自分には、理解できて
いないように思う。

一年生の人権学習で、「しようにいのある方と自分」について
学んだ。授業の中で、私が、一番自分を見つめ直したテーマは、
「脳性マヒによる重度な身体しようにいをもった方が、自分の働

いているレストランに来店したら？」である。先生は、こう質問
された。

「あなたが店員だったら、ほかのお客さんと同じように対応でき
ますか。」

私は、「分からない」に手を挙げた。最初に話を聞いただけの
時は、対応できる、しなくちゃいけないと思った。でも、その脳
性マヒの方の映像を見て、気持ちが揺らいだ。

歩行器を使っているが、一歩進むのも困難そうな方で、そのう
え、何を話しているのか全く分からない。この人と会話をするの
は、大変そうだ、面倒くさそうだと思った。

でも、これは見た目による、私の勝手な判断だ。見た目で決め
つけるのはいけないけれど、どこかでそれをやってしまう。

それでも私は、もし店員になったら、対応はするだろう。ほか
のお客さんと、全く同じ対応はできないし、面倒くさいと感じて
いると思うけれど、かわいそうな人に優しくしているという自負
が、そうさせているだけなのだ。

そう考えた時に、私は「分からない」という考えに達したのだ
と思う。

もう一つ、私には、「差別」ということを考えさせられた経験

がある。

お正月に、家族でショッピングモールに出かけた時のことだ。

歩いていると、前から車いすに乗った男の子と、それをおす男性が歩いてきた。男の子に重度なしょうがいがあることは、一目で分かった。

すれ違った後ぐらいに、その車いすにかかっていたタオルが落ちた。男の子のよだれをふいていたものだった。持ち主の二人は、落としたことに、気付いていなかったようだ。私は、とっさに拾って追いかけた。

「これ、落しましたよ。」

と言って、タオルを差し出すと、車いすをおしていたお父さんらしい男性が、

「ありがとう、ありがとう。」

と言って、何度も頭を下げた。笑顔で私を見送ってくれている。

私も自然と笑顔になった。

「新年早々、いいことをしたな。」と思った。

しかし、よくよく考えると、落とし物を拾うことはあたりまえのことである。持ち主が、しょうがいのある方だったら、「いいこと」になるのか。私は、目の前に落とし物があつたから拾っただけなのか、いいことがしたくて拾ったのか、自分でもよく分か

らなくなった。自分の中で、とっさに差別の心が生まれたのかもしれない。きつと、今までにも、「いいこと」をしたという満足感の裏に、無意識で、「差別」をしていたんだと思う。

今まで、祖母や車いすの方をはじめ、大変そうだなと思った人には、手助けをしてきた。それは、きつと、相手が手を必要としているだろう、喜んでくれるだろうと、私が勝手にそう考えていたからである。その思い込みが、時に、「差別」だと相手に感じられ、不快な思いをさせてしまうのだということに、気付いていなかった。

私の何気ない言動が、「平等」なのか、「差別」なのかは、私はどういう気持ちでやっているのかではなく、相手がどう受け止めているかだったのだ。

本当に助けてほしいのか、黙って受け流してほしいのか、それを見極めるのは難しい。相手の気持ちになって、本当に望んでいることを考えられるようになれば、真の意味での「平等」に一步步づくことができるのだろう。

中学生の部 優秀賞

平和で差別のない社会へ

三輪中学校 一年 山内 咲葵

日本国憲法には、基本的人権というものが定められている。すべての国民は、法の下に平等であり、差別してはいけないとされている。

私の妹は、今七歳だが、先天性の感音性難聴という聴覚障害をもっており、これは、一生治ることはない。一生「聞こえない」「聞こえない」という世界で、生きていかなければならない。

生まれたばかりのころは、そんな妹が、これからだいたいようぶなのかと、私は心配だった。だが、妹は、全く聞こえないわけでもなく、診断の結果、両耳の聴力が、五十デシベル位で、静かな場所なら、話し声くらいの音が聞こえるということだった。

でも、それは、『音』であって、必ずしも、『声』ではない。

そこで、残った聴力を活かして、言葉を覚えるため、生後十ヶ月ぐらいから、補聴器を付けるようになった。私は、それが本当に嫌だった。最低な姉だったと思うけど、そんな妹を、他人に見られるのが恥ずかしかった。外に出かけるときは、外して行って欲しかった。

でも、補聴器をつけている時と、付けていない時では、明らかに反応が違い、成長するにつれ、補聴器は妹にとって、なくてはならないものなのだと思えるようになっていった。

だが、補聴器は、万能ではない。補聴器を付けた状態で、妹は、やっと普通の人が両耳に指を突っ込んでいる状態の三十デシベルくらいらしい。

また、補聴器は、人の話し声だけでなく、周りの雑音（ドアを閉める音、物を置いた時の音、風やエアコンの音、自分が話している人以外の話し声など）も大きくしてしまうので、それを付けたからといって、話が完璧にわかるという訳ではない。

実際、私は、妹の補聴器を付けさせてもらったことがあるが、周りの音がうるさくて、とてもストレスになった。こんな状態の中で妹は、人と話したり、テレビを見たりしているのかと思うと、本当にかわいそうだと思った。

妹に限らず、聴覚障害を持っている人が、困っている例として、放送やマイクの音が聞き取れない。教室でガヤガヤしていると、誰が発言しているかわからないし、何を話したかもわからない。雑談が聞き取れず、みんながなんで笑っているのかかわからない。「一時」と「七時」、「お兄ちゃん」と「おじいちゃん」などの区別がつかない言葉がある。などなど、こんな不便さから、正しい

行動がとれなかったり、集団の中に入らず、孤立してしまったり、イントネーションや声の調子などの微妙なニュアンスが分からず、場の雰囲気をつかめない、自己中心的な人と誤解されてしまうことが多いらしい。

そんな聴覚障害者も、聞こえる人たちと同じように聞く権利、知る権利をもっている。聴覚障害者のこうした権利を守るためには、情報保障が欠かせない。例えば手話、要約筆記（音声で話されている内容を要約して文字化するもの）、筆談、字幕などの情報保障があれば、少しでもそれは改善されると思う。

ただ、手話や文字通訳が完璧であれば、聴覚障害者の権利が守られるかといえば、そうではないと思う。文字通訳では、やはり情報が少し遅れるわけだし、内容を理解して、自分が発言しようとした時には、すでに話題が次に移ってしまったたり、雑談等までいちいち通訳してもらうことは難しい。

聴覚障害者である以上、健聴者と百パーセント同じということはないが、少しでも百に近づけるよう、集団の中で、取り残されることはないよう、できる限りのことを私たち健聴者がすることが、聴覚障害者の権利を守ることになると思う。

先日、妹が、スイミングに行ったとき、いつものように水着に着がえ、補聴器を外した。そして、それをロッカーの中に置いて

おいたのに、プールから上がったたら、補聴器がなくなっていた。

置いていったのに、なくなっているから、きつとだれかが持っていてしまったのだろう。妹にとっては、補聴器がなくなることは、『音』を奪われることと同じなのに、それを分かってくれているだろうか。妹にとっては、補聴器は道具ではなく、体の一部といってもいいくらい、生きていくうえでとても大切な物なのに、それを分かってくれているだろうか。補聴器がなくなるということは、情報を得る権利、人とコミュニケーションをとる権利を奪っていることと同じなのに、それを分かってくれているだろうか。きつと興味本位で持っていてしまったのだろうか。

全ての国民は、法の下に平等であり、差別していけないとされているけれど、やっぱり聴覚障害者は、健聴者と平等にあつかわれないのだと思った。

妹は、補聴器がなくなって、別の補聴器を付けている時、とても不安そうだった。音を聞きもらさないよう必死そうだった。私は、やっぱり妹にとっては、とても大切な物なんだと改めて思った。

私は、言葉だけの法ではなく、実行する法にしたい。そして、妹に聞こえる世界をおしえるばかりではなく、私が、「聞こえない世界」を、もっと知らなければいけないと思う。

中学生の部 優秀賞

私は「ハーフ」ではなく、『ダブル』だ

岐北中学校 三年 伊藤 侑真

世界には、日本人と日本人の子に生まれた、一つの国籍を持つ者、日本人と韓国人の子に生まれた、二つの国籍を持つ者がいる。私は、二つの国籍を持っている。

私は、ある日、日本と韓国の血を持っていることを、友達やクラスに話した。すると、友達に、

「じゃあ、ハーフだね。韓国語話してみて。」
と言われた。

私は、「韓国語を話してみて」と言われたことは、別に気にしていなかった。けれど、「ハーフ」という言葉は、良い気がせず、ものすごく不愉快だった。私は、「何故、半分日本人、半分韓国人という意味のハーフという言葉を使うのだろうか。」「それ以前に、ハーフという言葉の本当の意味を知っていて、言っているのだろうか。」「ハーフは差別用語ということを知っているのだろうか。」「などの疑問と、ハーフという言葉に対して、不快感を

おぼえた。

この疑問と不快感をおぼえる前のこと、私は、お父さんに、ハーフの意味についてたずねた。するとお父さんに、

「ハーフと言われたのか。」

「あんたは、ハーフではなく、ダブルだ。」

と、懸命な顔で言われた。その理由が知りたく、私は何故かとたずねた。すると、

『「ハーフ」という言葉は、二つの血を持っている言葉ではなく、日本の血、韓国の血を半分ずつ持っているという意味だ。』

と言った。私は、その言葉に対して、

「右半分は日本人。左半分は韓国人の血が流れているという意味ってこと？」

と聞いたら、そうだと聞いた。私は、

「二つの国籍を持っているから、日本と韓国のよいところと、改善点がわかるし、二つの国の文化がわかるから、一步、世界へ飛び出しているのになあ。」

と話したら、うなずいてくれた。そして、

「あんたはダブルだ。ハーフと言われたら、ダブルだと言え。分

かったか。」

と、本気で言われた。

私は、この話し合いにより、ハーフという言葉は、血が半々で、日本人ではなく、韓国人でもない。つまり、普通の人間ではない。という答えを出した。

その答えが出た瞬間、その言葉に対して、怒りや恐怖が芽ばえ、もう二度と聞きたくないという思いや、ハーフという言葉がなくさないといけないという思いになった。

今年の一学期、スイスから転校してきたK君が、作文の大会に出た。その大会の前に、クラスでK君の作文を聞いた。

内容は、スイスにいる頃、スイスの日本人学校で、ダブルの子に会ったそうだ。その子はいじめられていたそうだ。きっと二つの国籍を持っているから、本能的に、僕達とは違う人だと思い、いじめていたのだろうと、私は思った。

でも、K君は、その子と関わって、普通だと感じ、その子の二つの国についてなどの話を聞いて、ハーフではなく、ダブルということがわかったそうだ。

K君が作文を読んでいる時、まさしく一番強調して言った言葉が、「ハーフではなく、『ダブル』なのに。」の『ダブル』だった。

私は、K君の大きな声に驚きもしたが、今までに味わったことのない感動と、今まで言われたハーフの一言が、きれいになくなった感じと、今までハーフと言われて、勇気を出せずに、ダブルと言えなかった私に、勇気と自信を与えてくれた。その時は、涙が出てきた。泣く姿はみつともないと思い、ガマンをしていたが、涙が流れそうだった。

クラスの皆は、K君の作文の内容が、あまりわからないようだったが、私だけでも、K君の作文を理解できて良かったと思った。そして、私達、ダブルの人に対して、よく理解して、いいところがわかるすてきな友達だと思った。

今までのいろいろな経験を通して、ハーフではなく、ダブルだと主張してくれる友達がいる。私は、ダブルという立場で、ハーフと呼ばれる人々をなくし、世界と関わるのが重要だと、伝えないといけないと思う。

また、私には夢がある。その夢を通して、世界中の人々に、ハーフではなく、ダブルということを伝えていきたい。